騎楼と飄楼による街路整備の実施過程

—1930年代初頭、中国福建省の厦門における都市改造—

REDESIGNING AMOY (XIAMEN)

City improvement by street planning with covered-sidewalks in a southern China
during the early 1930s

恩田重直*

Shigenao ONDA

This paper explains how streets and their facing buildings in the southern Chinese city of Amoy (Xiamen) were redesigned during a city improvement plan in the early 1930s. By using a map from the “Simingxilu and Shengpinglu Street Plan” and other planning documents, I show how the new street plan was superimposed atop the city’s old urban district. In addition, I have also conducted onsite surveys of existing buildings, verified if the buildings were built to plan or not, investigated the process of land and building expropriation, and discuss the building of the city’s characteristic covered-sidewalks (*qilou* or *piaolou*).

Keywords : “Simingxilu and Shengpinglu Street Plan”, city improvement, *qilou* and *piaolou*, reorganization of old urban district, land and building expropriation, Amoy (Xiamen) China

『思明西路昇平路計画図』、都市改造、騎楼と飄楼、既成市街の再編、土地建物の収用、中国福建省厦門

1. はじめに

中国福建省の厦門では、1920 年前後から 30 年代半ばにかけて都市改造が行われた。都市改造の目的は、17 世紀末以来、交易の発展に伴い城塞の外側へ無秩序に広がった市街地を¹、南洋に開かれた港湾都市としてふさわしい都市に更改することにあった²。その結果、既成市街の上に縦横無隅に重ねられた街路計画が実施され、広幅員の街路が登場すると同時に、街路沿いには新たな建物が建てられたことで従前の街並みは一新されることになる。その際、都市改造であるがゆえに、既成市街の破壊あるいは制約を伴うものであったことはいままでもない。本稿は、街路沿いの建物もあわせて整備された当時の街路計画に着目し、既存の街路や建物といった既成市街のかかわりに主眼を置きながら、計画から実現に至る過程を明らかにすることを目的としている。

都市改造により建設された街路沿いの建物は、街路両側に設けられた歩道を建物の一部で覆ったことに特徴がある。この歩道を覆う形態には、「騎楼」と「飄楼」の二つが存在する。騎楼は街路に迫り出した 2 階以上を 1 階部分の柱が支えることで、飄楼は 1 階壁面より街路に若干迫り出した上階に片持梁で支えられたバルコニーを設けて、半戸外の歩道をつくりだすものである。こうした建物に関する既往研究では、専ら騎楼ばかりが注目されてきた。その背景には、

騎楼は連続することで柱廊を形づくり、特徴的な街並みが生みだされたことに加えて、福建省や広東省などの大小様々な都市に見られるのみならず、台湾や香港、さらにはシンガポールなど、南シナ海を中心に国境を跨いで広く分布していることが関係していよう。これらの既往研究では、複数の都市を対象に騎楼整備の計画主体や形態の特徴を系統的に明らかにすることに主眼が置かれた³。厦門を考察の対象に含めたものも少なくないが、他の都市と比して史料不足の感否めず、騎楼の幅員や高さ、あるいは市政機関の変遷などについて言及するにとどまっている⁴。当然、都市改造により整備されたことにも触れられるが、都市改造として騎楼や飄楼を有する建物を整備しながら如何に既成市街を再編したのか、その過程について実態が詳らかにされることはなかったといっても過言ではない。

上記した研究状況を踏まえ、本稿ではこれまで扱われることのなかった、当時の街路計画図である『思明西路昇平路計画図』（以下、『計画図』）を用いて考察を進めていく（図 1⁹）。この『計画図』は、詳細に描かれた既成市街の上に街路計画が重ねられており、街路計画の実施に伴い、破壊され消失した既存の街路や建物を復元することができるきわめて貴重な史料である。また、街路計画は単に計画された街路幅員だけが示されたものではなく、一部では街路沿いの建物の敷地割も計画されている。本稿は、『計画図』の作成意図を考

* 専門学校・東京テクニカルカレッジ 講師・工修

Lecturer, Tokyo Technical College, M. Eng.

図1 『思明西路昇平路計画図』(次頁と見開き。網掛け部分は、図4で取り上げた範囲。)

図2 『計画図』の範囲と廈門市街

察した上で、計画の実施に際して『計画図』通りに遂行されたのか否かを明らかにするものである。幸い、街路計画に伴い建設された建物は少なからず現存しており、これらを実測調査し、『計画図』と比較することにより、計画と実現の差異を分析することが可能となる。そこで、現地にて『計画図』の範囲のうち、8例の建物について実測及び聞き取り調査を実施すると同時に、計画された街路沿いに建設された建物の間口幅を全て実測し、個々の建物の奥行きを地図上で確認した⁷⁾。あわせて、街路沿いに建てられた建物の連続立面図も作成した⁸⁾。これらの現地調査での成果をもとに、文献史料もあわせて用いながら、都市改造における街路計画の立案から実現に至る過程を実証的に解き明かそうとするものが本稿である。

2. 『計画図』の作成背景

『計画図』には、思明西路を中心として、西側に連なる大中路、昇平路の一部が計画されている。これらは、海防拠点として14世紀末に建設された城塞の西側に大きく展開していた既成市街のほぼ中

央に位置する(図2⁹⁾)。同名の街路が現存し、街路の形状もほぼ一致するので場所を特定することができるのであるが、『計画図』に明記された図面解釈の基礎となる情報は方位のみで、凡例や縮尺、さらには作成者や作成年代などが一切記載されていない。そのため、まずは『計画図』の作成背景について検討することからはじめなければならない。

2-1. 『計画図』の内容と縮尺

『計画図』は線種を使い分けることで、既存の街路や建物と、新たに計画した街路や敷地割を表現している。前者は基本的に実線で表記されており、所々に街路名や建物の中庭を意味する「天井」などの文字が見られ、個々の建物の配置がわかるほど詳細である。後者は基本的に一点鎖線を用い、街路幅員などの寸法が記載されている。さらに、思明西路においては、街路に沿って番号が振られた短冊状の敷地割が整然と展開する。『計画図』が、既成市街の上に計画を重ねていることは明白である。

記載された既存の建物から縮尺が類推できる。開口部の位置や壁の配置などがほぼ一致する建物が、一部に現存しているからである。その建物の実測値と計画図を比較すると、縮尺は1/240に近い数値を示し、街路幅員などの寸法の単位はフィートであると考えられる¹⁰⁾。

また、現存する建物との比較により、描かれた既存の建物の壁体は単線が木壁で、複線が磚壁であることがわかる。このように詳細に描かれていることは、個々の建物の測量、調査が行われたことを示唆している。廈門において、家屋地図の製作に着手するのは1929年のことで、漳厦海軍警備司令部に付設された測量処により実施され、1/240で作成された¹¹⁾。その主たる目的は、地籍を整理し、土地税を改良することにあつた¹²⁾。『計画図』と縮尺が一致する上、『計画図』の既存の建物に振られた番号が地籍を整理するためのものであると考えれば、『計画図』に記載された既成市街はこの成果を引用したものであるといえよう。

2-2. 『計画図』の作成年代と作成者

作成年代と作成者に関しては、当時の文献史料から特定するに至

っていない。その中で、最も信頼に値するのは、当時の市政機関で陸路整備部門の主任等を歴任した技師である郭景村が、1960年代に著した往時の市政に関する文章である¹³。それによると、1930年もしくは31年に街路開発の手法を改め、思明西路、大中路、昇平路などで採用したという¹⁴。ここでいう街路開発の手法とは、「新区（筆者注：街路開発の範囲）において、全ての建物を公費で収用し、一斉にクリアランスして土地を均す」というものだった¹⁵。街路開発に「新区」という言葉を用いているのは、街路だけではなく、街路沿いの敷地もあわせて計画したためである。『計画図』の大部分を占める思明西路において、敷地割が計画されていることは、『計画図』がこの手法にもとづいて作成されたことを示唆している。また、既存の建物が基本的に計画と重なる部分しか描かれていないことは、これらが開発の範囲であると同時に、収用の対象であったと考えられ、『計画図』は収用も視野に入れながら作成されたものであるといえよう。さらに、製作が進められていた家屋地図とも年代的に辻褄が合う。

一方、工事の進捗状況に着目すると、1932年2月には思明西路が完成しており、1932年3～5月の間に思明西路でいくつかの建物が竣工している¹⁶。したがって、『計画図』の作成年代は、1930～31年の間であるといえる。そして、この時期の市政機関は市政処であり、既成市街の街路計画を担う路政辦事処と、海岸線や山地など整地を伴う事業を行う堤工辦事処の二つの組織で執り行われている¹⁷。既成市街に重ねられた街路計画である『計画図』は、路政辦事処が担当したといえ、その中でも設計課により作成されたと推測される¹⁸。

3. 描かれた街路計画

『計画図』には当然、新設街路の計画が示されているのであるが、すでに街路計画が実施された場所も含まれている。それは、思明西路の東端、すなわち『計画図』の右端であり、幅員の広い街路沿いに既存の建物として騎楼を有する建物が描かれているのが確認できる¹⁹。ここは、従前に存在していた蘆菜河を埋め立てて、1926年春から27年にかけて整備した場所であり、完成部分は蘆菜河上に限られ

ている²⁰。これと接続するように計画された『計画図』の街路は、完成部分が新たに登場した土地の上に計画されたのとは異なり、既存の建物や街路が存在する既成市街の上に重ねられた計画なのである。

3-1. 既成市街に重ねられた線的な街路計画

計画された街路のうち、大中路は既存の街路を拡幅する計画であるが、思明西路と昇平路は既存の街路と全く関係なく計画されている。これらの街路は幅員が30、もしくは36フィートで、両側には8フィート幅の歩道を付設する²¹。36フィートの幅員で計画された場所は、思明西路の完成部分と接続する地点から既存の街路である局口街の上に計画された交差点までのわずかな区間である。思明西路は、この交差点の東西で街路幅員が異なるばかりでなく、方向も変化しており、完成部分が暗示する当初の計画を変更したといえよう。

さて、局口街との交差点以西の思明西路では、敷地割も計画されているのが特徴である。既成市街をぶちぬいて計画された思明西路において、隙間なく敷地が連続すれば、既存の街路は分断され、袋小路となる。それを回避するように、所々に「巷」、すなわち路地を設け、既存の街路と接続するように計画されている。これらの巷は、街路の北側と南側にそれぞれ3箇所見られ、幅員は、8.14フィートの2種類ある（図3²²）。その配置が均一ではなく、既存の街路と接続しやすい場所に設けられていることは、既成市街を読み取りながら計画が進められた結果であるといえる。つまり、街路計画は新設の街路と既存の街路の共存を企図している。決して、新設の街路で囲まれた街区を一挙に再開発しようとしたのではなく、既成市街の存在を認めながら新設の街路を線的に整備することで既成市街を再編しようとしたことを、『計画図』は示唆しているのである。

3-2. 計画された敷地と既存の敷地の関係

思明西路に計画された敷地の規模は、円弧の隅切りがなされた角地を除いて、間口15フィート、奥行50フィートである²³。これらの敷地は、「店地」、あるいは「舗址」と表現されたように、店舗を建設することが想定されていた²⁴。従前の店舗の敷地もまた、間口が狭く、奥行が長かったことは、『計画図』の大走馬路と局口街沿いの建

図3 「巷」の計画と既存の街路

表1 思明西路の敷地計画(上)と既存店舗の敷地規模(下)

思明西路計画	間口		奥行		敷地面積 (㎡)
	(mm)	(feet)	(mm)	(feet)	
角地以外の敷地	4572	15.00	15240	50.00	69.68
歩道用地	4572	15.00	2438	8.00	11.15

既存街路名	戸数	平均間口		平均奥行		平均敷地面積 (㎡)
		(mm)	(feet)	(mm)	(feet)	
局口街東側	16	3840	12.60	16940	55.58	67.54
局口街西側	15	3953	12.97	11977	39.30	49.25
大走馬路東側	36	3946	12.95	15785	51.79	70.40
大走馬路西側	35	3943	12.94	13444	44.11	57.92
計	102	3921	12.86	14537	47.69	61.28

表2 計画された敷地面積(上)と収用対象の敷地面積・建築面積(下)

		計画戸数	敷地面積(㎡)		歩道用地(㎡)	
			平均	小計	平均	小計
思明西路	角地	10	101.05	1010.53	26.91	269.12
	一般	71	69.68	4947.28	11.15	791.65
計		81	73.55	5957.81	13.10	1060.77

		計画範囲 重複戸数	敷地面積(㎡)		建築面積(㎡)	
			平均	小計	平均	小計
既存街路	局口街	13	52.08	677.01	52.08	677.01
	桂洲堆	17	142.39	2420.70	109.21	1856.54
	山仔頂	28	128.92	3609.82	96.78	2709.86
	周厝内	6	127.11	762.67	106.66	639.96
	吊灯巷	5	314.88	1574.39	214.64	1073.18
	大走馬路	12	83.52	1002.25	83.52	1002.25
計		81	124.04	10046.84	98.26	7958.80

表3 思明西路の建築計画の延べ面積

		戸数	床面積				3階建の延べ床面積	
			1階	小計	2階以上	小計	1戸あたり	小計
思明西路	角地	10	74.14	741.41	101.05	1010.53	276.25	2762.47
	一般	71	58.53	4155.63	69.68	4947.28	197.89	14050.19
計		81	—	4897.04	—	5957.81	—	16812.66

表4 既成市街の収用結果

計画街路名	開発手法	既存街路名	戸数	収用結果		
				全収用(%)	未収用(%)	一部収用(%)
思明西路(局口街以東)	既存市街横断	局口街	18	17 (94.4%)	1 (5.6%)	0 (0.0%)
		局口街	15	15 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
		桂洲堆	17	11 (64.7%)	4 (23.5%)	2 (11.8%)
思明西路(局口街以西)	既存市街横断	山仔頂	32	21 (65.6%)	7 (21.9%)	4 (12.5%)
		周厝内	6	5 (83.3%)	0 (0.0%)	1 (16.7%)
		吊灯巷	5	4 (80.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)
大中路	既存市街縦断	大走馬路	71	71 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
昇平路	既存市街縦断(縦断)		11	11 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
計			165	155 (93.9%)	13 (7.9%)	7 (4.2%)

物から読み取れる²⁵⁾。従前の店舗と計画された敷地の規模を比較すると、計画の方が間口、奥行ともに広がっている(表1²⁶⁾)。計画された敷地には、歩道用地が含まれることに留意しなければならないが、従前の店舗の敷地規模をほぼ維持しているといえよう。

しかし、局口街との交差点以西の思明西路は、既存の店舗が並ぶ場所に計画されたわけではない。計画の範囲における既存の建物は、店舗と比べて間口が広く、中庭をもつものが多い。そこで、検討すべきことは、計画の範囲と重なる部分における既存の建物の戸数や敷地面積、建築面積である(表2²⁷⁾)。戸数は計画範囲に存在しているものが81戸であるのに対して、計画された敷地は丸で囲まれた番号が示すように81戸が計画されており、完全に一致する。一方、既存

の敷地面積に対して、計画によるそれが圧倒的に減少していることは、街路用地として拠出されたといえる。

戸数を維持しつつ街路を通すことは相当な減歩がなされることを示しているが、注目すべきは建物の延べ面積である。既存の建物の延べ面積は、階数がわからないことから、厳密な数値を算出することはできない。しかし、「市内の住宅はほとんどが平屋であり、商業地区の店舗でも2層以上はきわめて少ない」というように²⁸⁾、既存の建物の建築面積は、延べ面積に限りなく近い値を示していると考えられる。計画された敷地に建設された建物は、後述するように基本的に3階建であったことを鑑みれば、仮に既存の建物が全て2階建であったとしても、既存の建物の延べ面積を凌駕する(表3)。また、既存の建物の建築面積が延べ面積と近い値を示しているのであれば、計画された敷地に建設された建物の1階部分を店舗として、2階以上と切り離して店子に貸したとしても、2階以上の延べ床面積で既存の建物の延べ面積を確保できる計算が成り立つのである。

4. 計画と実現の差異

広幅員の街路とあわせて街路沿いの建物を更新する計画を実現させるための条件は、計画と重なる既存の土地、建物を全て収用することである。計画の実施結果は、街路のみに着目すれば、大中路における昇平路との交差点より西側だけがわずかに実現しなかったのを除き、それ以外は『計画図』通りに実現している。ところが、敷地割も計画された局口街との交差点以西の思明西路では、必ずしも『計画図』のような敷地割が実現しているわけではない。また、敷地割の所々に計画された巷は、計画個数こそ満たしているが、場所や幅員は計画通りには実現していない。

4-1. 収用と敷地割の画定

表4は、『計画図』に記載された既存の建物の収用結果をまとめたものである²⁹⁾。大中路、昇平路では、全て敷地全体を収用されている一方、思明西路では従前の敷地の一部しか収用されていないものや未収用のものが存在しており、これらが敷地割に影響を与えていることはいうまでもない。具体的な事例を通して確認していきたい。

1). 収用の実態

図4は、思明西路と局口街の交差点のすぐ西側に位置する。計画の実施以前には、桂洲堆という街路が南東から北西に向かって通っていた場所であり、ここにはあらゆる収用の事例が網羅されている。

敷地の全てが収用されたものには、局口街沿いの敷地や桂洲堆N.5~7、N.12~17がある。いずれも計画の範囲内に敷地が収まっており、多くが街路用地や歩道用地にまたがっている。次に、敷地の一部が収用されたものに、N.8、N.19がある。N.8は収用以前、計画された敷地割を縦断する長方形の敷地に3つの棟が左右対称に配置されていた。そのうち、敷地の後方に建つ、主屋と思われる建物は、現存する建物と間口、奥行の幅に加えて、室の構成も完全に一致することから³⁰⁾、これを残して収用が進められたといえる(図4、5のC-C')。ちなみに、前面にヴェランダをもつ3階建であり、外観は西洋風のデザインである。最後に未収用のものには、N.9、N.22などがある³¹⁾。N.9、N.22のいずれも『計画図』と現存する建物の配置が一致することから³²⁾、現存する建物は『計画図』の作成以前から存在していたといえる(図4、5のA-A')。

このように収用は、街路用地と歩道用地については余すところな

く進められた一方、計画された街路から遠ざかるにつれ徹底していないのである。当然、収用の結果は計画された敷地割に影響をもたらした。計画の変更を余儀なく促すことになった。

収用された土地が整備されたことは、既存の街路と計画された街路との間に生じている高低差からうかがい知れる。桂洲堆は思明西路が実現したことにより分断され、南側では袋小路となったのに対して、北側ではほぼ計画通りに設置された巷により思明西路と接続した。実現した巷は、桂洲堆と思明西路との間にある約3メートルの高低差を階段で処理しているのである。同時に、これらの範囲において収用された土地が、周囲の収用されなかった土地よりも低いことは、収用の範囲が掘削されたことを示している³³。

2). 土地の払い下げと敷地割の画定

整備された土地は、「全てにおいて、深度と幅、階数や高さを画定した後、各土地の価格を決め、まず収用の対象者に払い下げたが、もしそれらが払い下げを受けないならば、公共機関により他に売却された」³⁴。つまり、市政機関が計画した街路沿いの敷地に関して、直接的に関与したのは敷地割の画定までであり、各敷地には建築条件が付加されたものの、建物の建設は払い下げ対象者に委ねられた。そして、払い下げは収用の対象者、すなわち従前の所有者が優先的に取得することができたのである。このことは、敷地割の画定と深く関係している。

図4から明らかなように、思明西路沿いの敷地は、収用の結果を反映して、計画された奥行よりも浅かったり、深かったり、あるいは敷地後方の境界線が斜になったりしている。一方、間口は基本的に計画幅である15フィートの近似値のものが多いが、一部で差が大きなものも存在する(表5³⁵)。

計画された間口幅に満たないものが連続する例として、上述した桂洲堆N.8の跡地を中心に建設された建物群がある。N.8には前述した収用を逃れた建物があるが、もしこれを残しつつ計画よりも奥行の浅い建物が思明西路に沿って連続したのであれば、この建物は街路との接続が絶たれることになる。そのため、結果的には思明西路に面して専用の大門を設けることで、この問題を解決している(図6)。計画された間口幅に満たない建物は、この大門の東側の5戸と西側

表5 計画の間口幅と実現した間口幅の乖離

戸数	平均間口 (mm) (ft)	計画間口幅15フィート(4,572mm)との乖離				
		-10%以下	-5%以下-10%未満	±5%未満	+5%以上+10%未満	+10%以上
思明西路北側	24 4,536 14.88	1 (4.2%)	7 (29.2%)	14 (58.3%)	1 (4.2%)	1 (4.2%)
思明西路南側	35 4,640 15.22	2 (5.7%)	2 (5.7%)	27 (77.1%)	1 (2.9%)	3 (8.6%)
計	59 4,588 15.06	3 (5.1%)	9 (15.3%)	41 (69.5%)	2 (3.4%)	4 (6.8%)

図4 局口街西側の平面図(実測図は思明西路沿いの建物の2階を基準とした。)

図5 平面図(図4)に対応する断面図(思明西路の海拔高さを基準として土地の高さも表現している)

図6 思明西路北側の大門を中心とした連続立面図

写真1 昇平路の懸挑を有する建物(1997年筆者撮影)

の3戸である³⁶。これらの建物の外観に着目すると、少なくとも東側の3戸と西側の3戸で同一のデザインが採用されていることは³⁷、同一の建築主により建設されたことを示唆している。また、大門に隣接する西側の2戸が、2階部分でつながっていることは³⁸、そのことを裏付けていよう(図4、5のB-B'北側の建物)。

これらの建物の間口が狭いことと大門が設けられたことは、密接に関係している。なぜなら、これらの建物の間口幅と大門の幅を合計し、建物の戸数で除すと、15フィートに限りなく近い値となるからである³⁹。つまり、従前のN.8の所有者がその跡地や隣接地を優先的に取得し、『計画図』の計画戸数を確保しながら、個々の間口幅を狭めることで、収用を逃れた建物へアクセスするための土地を捻出したと考えられるのである。加えて、収用時点において、収用の対象となる所有者と市政機関との間で、払い下げ、さらには土地整備後の建築計画が協議されていたことも示唆している。

4-2. 課せられた建築条件

前述したように、払い下げられた個々の敷地に階数や高さといった建築条件が付加されていたことは、当然、これらを示した図表や文書などが存在したはずであるが、目下のところ確認できていない。しかし、実現した建物を仔細に検討すれば、当時の建築規則の一端が浮かび上がってくる。

1). 階数と高さ制限

計画された街路沿いの敷地は規模の大小こそあれ、街路用地と歩道用地の収用が滞りなく進められた結果、広幅員の街路に面して3,4階建の建物が連続した。これらの建物の階数が規定されていたことは、連続立面図から読み取ることができる。すなわち、角地の建物が4階建であり、角地以外の建物は3階建なのである。また、思明西路と大中路は丁字路を形づくるが、その突き当たりも4階建となっている。一部に例外が認められるものの、基本的に交差点に面した建物において4階建が、そして、それ以外の建物には3階建が規定されていたといえる。

周囲の建物より1階分高い交差点に面した建物は、ほとんどが交差点の中心に正面を向いている。その上、最上階には塔屋が設けられたものも散見され、交差点は都市改造を象徴する空間を生み出した。さらに、これらの建物は、計画された街路が直交していることが少ないために、街路の様々な地点に応じて変化する視線の中で目に留まるものが多い。階数を規制することにより、めりはりの利いた街路空間が創出されており、「街路の美化と景観の整備」に対して細心の配慮がなされていたといえよう⁴⁰。

高さ制限については明確にはわからないが、街路の斜度にあわせて軒の高さが変化していることは、規定の存在をうかがわせる。同時に、それにあわせるように歩道部分の高さも変化していることから、1階あるいは各階の高さも規定されていたのかもしれない。いずれにしても、階数や高さを規定することは、街並みの統制を図る一つの手段であったといえる。

2). 2つの建築形式

計画された街路沿いの建物には、全て『計画図』通りに1階部分に歩道が設けられた。歩道は建物の一部で覆われているが、「多くが騎楼あるいは飄楼にすべきことが規定されていた」というように⁴¹、『計画図』の範囲においても2つの形態が見出せる。歩道に迫り出した2階以上を1階部分の柱で支える騎楼は、思明西路と大中路の

建物に採用されている。一方、街路に面した2階以上のバルコニーで歩道を覆う飄楼は、昇平路の建物で見られる(写真1)。騎楼と飄楼が各街路に混在することはなく、計画の段階で街路ごとに騎楼あるいは飄楼のいずれかを採用することが決められていたといえる。

騎楼や飄楼を採用した理由は、広幅員の街路が計画されたことに伴う従前の敷地面積の減少に対して、その「損失を補填するため」であった⁴²。前述したように、街路計画による既存の敷地面積の減少はきわめて大きく、街路沿いの建物を統制することで、少しでも既存の建物の規模を確保しようとした姿勢がうかがえる。とりわけ、歩道の面積が上階において、そのまま居室内面積に反映される騎楼は、理にかなっているといえる。同時に、騎楼や飄楼は連続することで特徴的な景観が生み出されており、設置の義務化により街並みを整えることを企図していたといえよう。

また、実現した騎楼や飄楼を有する建物は、実測事例から明らかのように、1階と2階以上が分断されているものが多い。これは、1階部分と2階以上の住人が異なることを示唆している。つまり、これらの建物は都市改造の根本にある人口密度の増加に伴う居住環境の悪化に対して、新たな都市居住の器を提供したといえるのである。

5. まとめ

以上、厦門において既成市街の再編を目的として、1930年代初頭に行われた街路整備について、当時の『計画図』を基礎に現存する建物の実測調査を踏まえ、計画から実現に至る過程について論じた。

既成市街の上に重ねられた街路計画は、広幅員の街路とあわせて街路沿いには騎楼や飄楼を有する建物の整備を企図したものであり、新設街路と既存の街路を巷で接続することで既成市街との共存が目論まれたものであった。実現には大々的な収用を要し、広幅員の街路の出現と引き換えに、既存の建物の敷地面積は減少を迫られることになるが、3,4階建で計画された騎楼や飄楼を有する建物は、敷地面積の損失を延べ床面積で補填することが可能な計画であったことを指摘した。つまり、港湾都市としての発展に伴い喫緊の課題であった店舗面積の増床を図りながらも、従前の居住面積を確保する建築として、騎楼や飄楼を有する建物が想定されていたのである。

収用の結果は、『計画図』通りの敷地割を実現させるには至らなかったが、街路用地と歩道用地の収用が滞りなく実施されたことで、広幅員の街路に沿って騎楼や飄楼を有する建物が連続した。騎楼や飄楼は連続することで、半戸外の歩道を形成したばかりでなく、特徴的な街並みを生み出した。その上、これらの建物は3階建を基調としながら、角地や突き当りなどの交差点に面した建物を4階建とするなど、階数や高さを規制することで景観にも配慮していることを明らかにした。

このように、騎楼や飄楼を有する建物の整備は、従前の居住面積を確保しつつ、近代の交通に対応しうる広幅員の街路の出現させると同時に、都市景観をも追求した、まさに都市改造なのである。

注

¹ 交易の発展に伴う港湾の整備については、拙稿「中国福建省の厦門における港湾空間の形成過程に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』第572号 pp.201-208, 2003.10.を参照されたい。

² 厦門工商広告社編『厦門工商業大観』(厦門工商広告社1932)の「第3章 市政」(pp.1-3)参照。

³ 騎楼に関する法令の整備に着目して論じたものに、国内では泉田英雄、黄俊銘の「屋根付テラスと連続歩廊の街並み景観について：東南アジアの植民地都市とその建築様式に

- 関する研究 その2)『日本建築学会計画系論文集』No.458, pp.145-153, 1994.4.) などがあり、中国では林冲の『騎樓型街屋的發展与形態的研究』(華南理工大学博士論文、私家版 2000) などがある。また、実測調査もとつて騎樓を分析したものに、茂木計一郎の『騎樓型民居の構成に関する研究』(『住宅総合研究財団研究年報』No.18, pp.309-323 住宅総合研究財団 1991) などがある。なお騎樓に該当する語句は、泉田、黃論文によると、「カキ・リマ」(インドネシア、シンガポール、マレーシア)、「ファイヴ・フット・ウェイ」(シンガポール、マレーシア)、「五脚基」(閩南語)、「亭仔脚」(台湾語) などがある。
- ⁴ 例えば、註3の泉田、黃論文 p.149 では、当時の厦門を調査した地理学者による論文(富田芳郎『南支那の聚落』『太平洋輿図』民族と文化 上巻』pp.357-390 河出書房 1944) を引用し、厦門では1920年代に都市改造が行われたい」と指摘するにとどまっている。また、註3の林冲の論文では、いみじくも「厦門騎樓的政策与相關法令章程規定、已無法有閱文獻得知、…(厦門の騎樓について、政策や関係する法令や規則、規定は、すでに文獻から知るすべがない、…)」(p.223) というように、直接的な法令を用いて厦門の騎樓を論じているわけではない。このような背景には、当時の中国は政局が不安定であったことに加え、日中戦争(1937)、さらには新中国成立(1949)以降に政治体制が変化したことによる史料の紛失あるいは分散があることは否めない。
- ⁵ 騎樓の建設と都市改造の関係を論じたものに、陳志宏の『厦門騎樓建設与近代城市改造』(『中国近代建築研究与保護 (一)』pp.320-328 清華大学出版社 1999) があり、本稿のテーマと重なるが、「都市改造以前の市街は自然発生的で計画性が見られないことは、都市改造に比較的大きな自由度を与えた(近代城市改造前厦門街道網絡基本是自然生長、…街道均無統一計画、這樣也給厦門近代城市规划有较大自由度。)」(p.323) とするなど、導き出された結論は本稿と全く異なるものとなっている。また、「四 厦門騎樓与城市同構關係」(p.324-326) では、騎樓を有する建物を四合院と呼ばれる前近代の専用住宅と比較し、騎樓の整備により伝統的な文化や価値観からの脱却が図られたと結論づけているが、商業建築として整備された騎樓と前近代の建物と比較するのであれば、四合院ではなく、前近代の店舗建築と比較するのが妥当であるといえる。
- ⁶ 厦門市図書館所蔵(D671/X463)のものをトレースした。原図の大きさは、枠線の高さ37cm、幅148cm(右側は破損しており枠線がないため図の切れ目まで)である。なお、タイトルは原図には表記されておらず、司書が整理する際につけられたと考えられる。
- ⁷ 1995年9月～97年9月の厦門大学留学期間、1998年8月、2000年8～10月、2001年9月に調査を行ない、実測調査は1/100の図面が描ける精度で実施した。また、建物の間口、奥行に関しては、2000年と2001年に調査し、福建省地質測繪院が1989年に測量した1/1000の地形図を利用した。なお、本稿で取り上げた事例の中には、すでに現存しないものも含まれている。
- ⁸ 計画された街路沿いの全ての建物を写真撮影し、実測調査を行った建物の実測値を参考にしながら作成した。
- ⁹ 現在の1/5000地形図(福建省測繪局1985年作成1988年出版)を基礎として、海岸線は1908年に江南陸軍学堂の卒業実習として作成された『厦門城市全図』(1/5000)から復元し、街路は『思明市政籌備処彙刊』(思明市政籌備処編、厦門僑文印書館1933.11.)などの文献や註7の地形図を参考に、現地調査を踏まえて作成した。
- ¹⁰ 『計画図』の桂洲堆N.8の建物の1棟、N.22の建物などが調査時点で現存していた。例えば、N.8の現存する建物は、壁の外面で計測した間口幅は13,090mm、奥行幅は11,860mmであり、『計画図』上の寸法は間口幅が53.5mm、奥行幅が48.5mmとなっており、これらから約1/245という縮尺が得られる。20フィートを1インチで表現すると、1(ft)=12(in)であるから、縮尺は1/240となる。寸法単位としてインチ・フィートを用いた直接的な理由は、現在のところ定かではないが、中国では1928年7月に国民政府が『中華民国權度標準方案』を公布したことにより、寸法体系は營造尺(1營造尺=0.32m)から市尺(1市尺=1/3m)が採用されたにもかかわらず、1920年前後に設立された厦門の市政機関は、1930年代前半まで『計画図』以外でインチ・フィートを用いた『計画図』を作成していることは、市政機関が国民政府に取り込まれていく過程において、当時の厦門に市政府が成立していなかったことにより、国民革命軍の海軍警備司令部に付属したという特殊な事情が関係していると思われる。なお、インチ・フィートが採用された背景を明らかにすることは、厦門の街路計画の起源を探る手がかりになると考えている。
- ¹¹ 厦門市土地志編纂委員会編の『厦門土地志』pp.120-121(鷺江出版社1996)によれば、1928年5月に測量処が設立し、福建省測量局から人員が派遣され、厦門島内の測量を開始し、1932年5月に市区全体の730幅が完成したという。
- ¹² 1929年4月20日(旧曆)に発布された『海軍海軍警備司令部設処測量厦島土地布告』『厦門市房地産志』pp.143-144所収)によれば、土地測量の結果として得られる市民の利益は、(1)四周の境界線を明確に記載することで不動産権が明確になる、(2)図表の入った権利証により不動産取引が円滑になる、(3)不動産による紛争がなくなる、(4)統一された履歴の入った証書により保管が便利になる、(5)所有地の規模に対して税金を課すことで納税が平均化される、の5点を提示している。このうち、(1),(2)は、各家屋の平面図が作成されたことを示唆している。
- ¹³ 郭景村『厦門開辟新区見聞(1926-1933)』『厦門文史資料』第19輯、pp.68-92、中国人民政治協商会厦門市委員会文史資料委員会1992)と張鎮世、郭景村『厦門早期の市政建設(1920-1938)』『厦門文史資料』第1輯、pp.107-126、中国人民政治協商会厦門市委員会文史資料委員会1963)の2編。前者は、その文章に付された編者による前言で、郭景村が1962年に書いた遺作であるとし、彼は厦門市政会の工程課測量員、市政督辦公署の路線係主任代理、路政処の路線係主任、工程科技師などの職務を歴任したという(p.68)。なお、註2の文献、「第3章 第2節 往昔市政之措施」(p.22)では、市政督辦公署の路線係主任は郭敬村とあり(「敬」は中国語の発音が「景」と同音であることから誤字であると考えられる)、また、「第3章 第8節 路政堤工之組織」(p.21)では、市政処の養路係主任は郭景村であったことが確認できる。
- ¹⁴ 註13の二つの文章で、年代の記述が異なる。『厦門開辟新区見聞(1926-1933)』(p.84)では1931年、『厦門早期の市政建設(1920-1938)』(p.116)では1930年となっている。
- ¹⁵ 註13の『厦門早期の市政建設(1920-1938)』(p.117)、「其辦法系將劃充新区範圍的房屋、全部由公家收買、統一拆卸而整理地庫、…」。

- ¹⁶ 註9の文献の編者である思明市籌備処とは、厦門に思明市を設置するための準備機関であり、1932年2月に設立し、それ以前の市政機関である市政処は工務局に改変され、未完工事が引き継がれた。「工作概況 (四) 關於工務行政」(p.36)に、思明西路がすでに完成していることが記載されている。また、思明西路における建物の竣工統計は、「思明市21年2月份至6月份建築統計表」(pp.26-34)に示されている。なお、「工作概況 (四) 關於工務行政」(pp.45-47)から、大中路、昇平路は未完の状態で工務局に引き継がれたが、本書が発刊された1932年10月にはすでに完成していることがわかる。
- ¹⁷ 註2の文献、「第3章 市政 第2節 往昔市政之措施」(pp.1-3)参照。
- ¹⁸ 註2の文献、「第3章 市政 第8節 路政堤工之組織」(p.21)参照。
- ¹⁹ 当該部分の思明西路には、北側に4戸、南側に1戸の建物が記載されており、南側の建物には街路と歩道の境界線上に騎樓の柱と思われる正方形が描かれている。なお、調査時点において、これらの建物は『計画図』と間口、奥行が一致することから、『計画図』に表記されたものが現存していたと考えられ、これらの建物はいずれも騎樓を有する建物であることから、『計画図』には柱が省略されているといえよう。同様に、南側の建物の西側の界壁は、歩道を遮っているが、これも誤記であると考えられる。
- ²⁰ 註9の1908年の地図を重ね合わせると、該当部分が藥業坊であったことがわかる。なお、開発年代については、註13の『厦門開辟新区見聞(1926-1933)』(p.75)参照。
- ²¹ 街路と歩道については、註19で示した完成部分と計画部分の接続地点において、街路境界線に該当するものが一点鎖線で描かれているのに対して、歩道に該当するものは街路境界線とは異なり、破線で表記されていることから、『計画図』では街路と歩道を分離して計画していたと判断した。なお、思明西路ではそれぞれの寸法が明記されている。
- ²² 註9の地形図に1908年の地図の街路を重ね、さらに『計画図』を重ね合わせて作成した。敷地番の間口、奥行は、『計画図』に明記されていないため、縮尺をもとに算出した。
- ²³ 註13の『厦門早期の市政建設(1920-1938)』(p.116)参照。
- ²⁴ 註2の文献、「第1章 地理」(pp.56-57)には、『計画図』に描かれた既存の街路である大走馬路沿いの各建物の地番に対して店名、業種が記載されている。この地番と『計画図』の地番を照らし合わせると、ほとんどが店舗であることがわかる。局口街の店舗に関する記述はないが、『厦門志』(周凱纂修、卷二 分城略、清道光19(1839)年)には、商業街を意味する「街市」に局口街が挙げられている上、「陳安成のお店が和順後保桂州墓口局口街にある」としており、局口街にはもともと店舗が集まっていたと考えられる。
- ²⁵ 間口、奥行、敷地面積は壁心で算出し、奥行は間口に垂直方向で最も深い部分とした。
- ²⁶ 局口街との交差点以西の思明西路において、一部でも計画と重なる敷地は全て対象とした。その際に、敷地の一部が計画と重なっているものは、その敷地全体で算出し、戸数は記載された地番の数で計算した。また、敷地内の空地は、『計画図』上で「天井」「空地」と明記された場所以外に、破線で示されている軒や現存する建物から明らかに空地であることがわかるものとし、不明な箇所は全て建築面積で算出した。
- ²⁸ 註13の『厦門早期の市政建設(1920-1938)』(p.109)、「市内住宅大多為平屋。在商業中心、店舗亦不過兩層樓屋。二層以上則不多見。…」
- ²⁹ 註7の現地調査をもとに作成。
- ³⁰ 註10参照。なお、この建物は3階建であるが、階段は記載されていない。
- ³¹ 調査時点では、桂洲堆N.20、N.21の建物は一部放棄がされていたが、その敷地規模は『計画図』と一致することから、これらも未収用であったと考えられる。
- ³² N.22に関しては、詳細な実測調査を行った。ここで生まれ育った住人(1996年11月4日の調査時点で80歳代の女性)からの聞き取り調査によれば、『計画図』では地番の振られていない建物には家族が少しずつ土地を購入し、現存している建物を建てたという。したがって、『計画図』に記載された地番は、所有ごとに振られているといえる。
- ³³ 註13の『厦門早期の市政建設(1920-1938)』(p.117)では、一手に土地を収用し、整備することで、街路の斜度を緩やかにすることができたとしている。また、註9の文献、「思明市21年3月份至6月份工程成績表」(p.24)には、1932年の5月に大中路で石の爆破が行われているが、これは地形を均すための作業であったと考えられる。
- ³⁴ 註13の『厦門早期の市政建設(1920-1938)』(p.117)、「…、劃定一律深度和寬度、以及建築層樓和高度、然後分段定価、由各被拆戸業主讓領。如被拆戸業主不願承領、則由公家另行發售。」
- ³⁵ 調査時点において、当時の建物が現存するものを対象として算出した。
- ³⁶ 大門の東側では、大門から東に向かって、4,330、4,250、4,330、4,320、3,980(mm)となっており、大門の西側では、大門から西に向かって、4,210、4,130、4,330(mm)となっており、いずれも15フィート(4,572mm)に満たない。
- ³⁷ 調査時点では、大門の東側の4、5戸目の建物はファサードの改装が行われており、これらは大門を挟んだ東西の3戸と全く異なる外観を呈している。しかし、大門を挟んだ東西の3戸と比べると、2、3階部分の窓の高さがほぼ同じ位置にあり、3列で構成される各階の窓の幅は中央を広くとり両側の窓を狭くするという同一の手法が見られる。また、これらの全ての建物には、中央の窓の両側に半円の付柱が設けられているが、大門の東側の4、5戸目の建物では半円の付柱が4階まで通っていないことは、4階部分が増築であるといえる。以上から、これらも建設当初は大門を挟んだ東西の3戸と同じデザインの外観であったと考えられる。
- ³⁸ 桂洲堆N.8の住人からの聞き取り調査によれば、かつてN.8に残された建物の2階ヴェランダ部分と大門の東側1戸目の3階部分はつながっていたという。この聞き取りを裏付けるように、両者の壁にはその痕跡が認められた。
- ³⁹ 大門の幅は、3,020(mm)である。東西の3戸の場合、 $(4,330+4,130+4,210+3,020+4,330+4,250+4,330)/6 \approx 4,768$ (mm) = 15.6 (ft) 同様に、東側の戸数が5戸の場合、 $(4,330+4,130+4,210+3,020+4,330+4,250+4,330+4,320+3,980)/8 \approx 4,614$ (mm) = 15.13 (ft)
- ⁴⁰ 註13の『厦門早期の市政建設(1920-1938)』(p.116)、「…市路的美化和整頓市容、…」。
- ⁴¹ 註13の『厦門開辟新区見聞(1926-1933)』(p.74)、「…、大多規定可建築樓或藏樓。」
- ⁴² 註13の『厦門開辟新区見聞(1926-1933)』(p.74)、「為了彌補地庫的損失、…」。

(2006年3月10日原稿受理、2006年9月25日採用決定)